先天性梅毒ニ於ケル肺炎ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 糸川, 角次郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38160

十全會雜誌　第十九卷第二號（第九十七號）　大正三年二月一日發行

原著及實驗

●先天性梅毒ニ於ケル肺炎ニ就テ

Ueber die Pneumonie bei der angeborenen Syphilis.

京都帝國大學醫科大學病理學教室
金澤醫學專門學校醫學士　糸川角次郎（大元卒業）

第一章　緒言

余ハ恩師速水博士ノ意向ニ基キ、題揭セル業蹟ニ從事シテヨリ玆ニ半歲餘其目的トスルトコロハ、先天性梅毒ニ於ケル肺炎ノ意義、殊ニ「プラスマ」細胞ノ關係ヲ解決セントスルニアリ、然ルニ身ハ軍籍ニ編入セラレ近ク入營スルノ光榮ヲ有ス、サレバ未ダ固ヨリ完成ヲ期スルニ至ラズト雖モ、業蹟着手以來ノ略叙ヲ試ミ、以テ識者ノ示敎ヲ仰ガント欲スル所以ナリ、

第二章　「プラスマ」細胞ノ文獻

抑モ「プラスマ」細胞（Plasmazellen）ナル名ノ起原ハ、ワルダイヤル（Waldeyer）氏ニシテ、エーールリツヒ（Ehrlich）氏ハ此中ヨリ「マスト」細胞（Mastzellen）ナルモノヲ區別セリ、然ルニウンナ（Unna）氏ハ「ポリクロメス、メチーレンブラウ」（polychromes Methylenblau）染色法ニヨリ、特殊ノ細胞型ヲ區別シ、更ラニ「プラスマ」細胞ナル名ヲ附與セリ、此ウンナ氏細胞型ヨリ、マルシヤルコー（Marschalko）氏ハ再ビ形態上ヨリ一種ノ型ヲ指適シ、其重要ナル特徵ヲ有セルコトヲ詳細ニ論述セリ、又ホダラ（Hodara）氏ハ造血臟器中ニ於テ「プラスマ」細胞ニ酷似セル細胞アルヲ見テ、之レヲ仮性「プラスマ」細胞（Pseudoplasmazellen）ト稱セリ、此他尙シユリツデ（Schridde）氏ハ淋巴成形細胞ト「プラスマ」細胞トノ移行型ヲ發見シ、之ニ淋巴成形「プラスマ」細胞（lymphoblastische Plasmazelle）ト命名セリ、余ハ今左ニ現今一般ニ「プラスマ」細胞ノ標準トシテ認メラル、マルシヤルコー氏ノ所謂眞正「プラスマ」細胞（echte Plasmazelle）ニ就テ述ブレバ、即チ細胞体ハ圓形又ハ卵圓形時ニハ稍長形ヲ帶ビ、稀レニ紡錘狀ヲ呈セルモノアリ、原形質ハ比較的多量ニシテ、且ツ壇基性色素ニテ濃厚ニ染色ス、而シテコハ蜂窩狀ノ「スポンギオプラスマ」（Spongioplasma）ト及ビ無造構性ノ又ハ僅カニ累積ノ狀ヲ呈セル所謂「グラノプラスマ」（Glanoplasma）トヨリナル、併シテ細胞核ハ偏心的位置ヲ占メ其「クロマチン」粒ハ核ノ周邊ニアリ、粗大ニシテ車輻狀（radspeichenartig）ニ配列ス、尙核ノ附近ニハ清朗ナル所謂核側凭（perinukleirer Hof）アルヲ常トス、

「プラスマ」細胞ノ由來

主ナル二說相對立セリ、

一ハ淋巴球ヨリ生ズルトスルモノニシテ所謂"haematogene Theorie"ナリ即チ「プラスマ」細胞ハ亡命(Imgrieren)セル淋巴球ヨリ成立スト、之レヲ初メテ唱導セシハマルシヤルコー氏ニシテ後クロムペツヘル、マキシモー、シユリツデ諸氏ノ贊同セシトコロナリ、

一ハ所謂 histogene Theorie ニシテ又二ツニ分ル、即チ

(甲)、凡テノ結締織固定細胞ハ「プラスマ」細胞ニ變化シ得ト云フ說ニシテウンナ、エールリヒ及ビハンネス諸氏ノ主ニ主張スルトコロタリ、

(乙)、內皮細胞又ハ外皮細胞(Indothelial Zellen oder Adventitielen-zllen)等ノ組織淋巴球(Gewebslymphozyten)ヨリ成立スルトスルモノニシテ主ニマルシヤン、パツペンハイム、フランク、速水諸氏ノ唱導セルトコロナリ、

尙ヨアンノビクス氏(Joannovics)ハ前記二者ノ折中說ヲ主張シ、「プラスマ」細胞ハ淋巴球ノ多核白血球及ビ結締織細胞ヨリ來リ得トナセリ、

「プラスマ」細胞ノ意義、

三ツノ大問題存ス、曰ク

一、「プラスマ」細胞ハ如何ナル場合現ハルルカ、

二、「プラスマ」細胞ノ出現ハ如何ナル特徵ヲ有スルカ、

三、「プラスマ」細胞ハ如何ナル機能ヲ營ムカ、

多クノ學者ノ說ニヨレバ、全ク急性ノ疾患ニ於テハ「プラスマ」細胞ヲ認メズ、之レニ反シテ亞急性及ビ慢性ノ疾患ニ於テハ殆ンド常ニ欠乏セルコトナシトセリ、尙「プラスマ」細胞ノ每常發見セラルヽハ、進行性又ハ急性炎症ノ治癒ニ趨ケル肉芽組織ノミナラズ、所謂傳染性肉芽性疾患ノ名ノ下ニ包括セラルヽトコロノ梅毒、結核、放線狀球菌、癩病等ニモ來ルモノナリ、又「プラスマ」細胞ハ痲毒性疾患ニ殊ニ多ク出現スルモノ、如シ、

併シテ結締織ノ繁殖ヲ來サシムル刺戟ハ又「プラスマ」細胞ノ發生ニ與ルモノニシテ、其疾病毒素ノ差違ニヨリ或ハ結締織ノ增殖ヲ來シ、或ハ「プラスマ」細胞ハ增殖スルモノトス、

「プラスマ」細胞ノ繁殖ハ有象分体及ビ無象分体、(mitotische und amitotische Teilung)ニヨル、而シテ多クノ學者ニ從ヘバ、前者ハ稀レニ見ルトコロニシテ、後者ハ屢々認ムルモノトス、

「プラスマ」細胞ニヨリ起ル特徵(Specifität)ニ就テハ各學者ニヨリ意見ヲ異ニス、シユリツデ氏ハ淋毒性喇叭管炎ニ於ケル研究ノ基礎ニヨリ、該疾病ノ診斷上重要ナル價値アルモノト見做セリ、又ヒプシユマン及アドレル(Hilschmann u. Adler)兩氏ハ子宮粘膜ノ炎症ニ常ニ多ク來ルモノトセリ、然レドモ之レニ反シ多クノ學者ハ何レノ處ニテモ其特有ノ意味ヲ否定セリ、其後マルシヤルコー、ヨアンノビクス、(Joannovics)プレツツ(Prötz)氏等ノ業蹟ニヨリ生理的ニ二三健康臟器ニモ「プラスマ」細胞ノ存スルコトヲ發表セリ、又最近ニ至リチエレー(Ceele)氏ハ梅毒ノ腎臟ニ於テ多クノ「プラスマ」細胞ヲ每常証明シ、曰ク、初生兒ノ腎臟ニ於テ、血管周圍殊ニ絲球体周圍及ビ細尿管內ニ於ケル「プラスマ」細胞ノ滲潤ハ先天性梅毒ニ對シ特有ノモノトナセリ、

「プラスマ」細胞ノ機能ニ就テハ、從來尙不明ニ屬ス、多クノ學者ハ「プラスマ」細胞ノ存スルトコロニ於テハ其組織消滅スルニヨリ、貪食機能

(phagozytäre Eigenschaft) ヲ有スルモノト記載セリ、

「プラスマ」細胞ノ運命、

恐ラクハ一定不變ノ組織成分ナラズシテ、寧ロ一時性ノモノトス、但シ時トシテハ永ク存スルコトアリ、然ラバ彼レノ運命ヤ果シテ如何、

二說アリ、即チ其一ハ變性破壞、空胞形成液化、硝子樣變性等ニ終ルトスルモノニシテ、又多クノ學者ノ說ニヨレバ、變性機轉ヲ除クノ外「プラスマ」細胞ハ結締織ノ造構ニ關與スルモノ、如シ、

第三章　材料及ビ研究方法

余ノ研究材料ハ、京都醫科大學病理學教室ニ於ケル屍体解剖、約二、二五〇例中ヨリ、臨牀上及ビ病理解剖上、先天性黴毒ト見做サレタルモノ二三例ヲ撰擇シ、其各例ヨリ肺、(左右両肺ノ諸所、約六箇所宛ヨリ、殊ニ病變ノ存スルトコロニテハ、注意シテ其部ヲ適當ニ採取セリ、)肝、腎、副腎、脾、大動脉等ノ各所ヨリ取リタリ、但シ肝、腎、副腎、脾、大動脉等ノ檢査ハ時日ナキ爲メ後日ニ讓ル、

尙比較材料トシテ、小兒加答兒性肺炎ノ十例ヨリ、前記同樣各臟器ヲ採取セリ、

材料ノ固定及ビ硬化ニハ「アルコール」「フォルマリン」ヲ用ヒタリ、固定セル材料ハ、之レヲ主トシテ「チェロイヂン」中ニ包埋シテ、後八乃至一〇「ミクロム」ノ切片トナシタリ、又材料ニヨリ時トシテハ「パラヒン」包埋法ヲモ行ヘリ、

染色方法トシテハ「ヘマトキシリン」「エオジン」共染色「ヴァンギーソン」「ポリクロメルスメチーレンブラウ」、「ピロニンメチールグリュン」及ビ「メーギムザ」等ナリトス而シテ「プラスマ」細胞染色ノ爲メニハ「ピロニンメチールグリュン」ヲ以テ最モ優レルモノト思考ス、

又「スピロヘーテーパルリーダ」ヲ檢スル爲メニ肝(殊ニ鎌狀靱帶及ビ左右両葉ノ各所)副腎等ヲ別ニ採取シ、此檢査方法トシテハ „Levaditi'sche Methode" ヲ用ヒタリ、而シテ「スピロヘーテーパルリーダ」ハ肝ニ於テハ證明ナシ得ザルモノモ、副腎ニ於テハ多數ニ其存在ヲ證明シ得ル、又副腎ニ證明シ得ザル肝ニハ亦之レヲ欠クヲ常トス、故ニ余ハ「スピロヘーテーパルリーダ」ノ證明ニハ、副腎ヲ檢スルヲ以テ、最モ其當ヲ得タルモノト斷定スルヲ憚カラズ、

第四章　肉眼的及ビ組織的所見

余ノ先天性黴毒ニ於ケル肺炎ノ二十二例ニ於テハ、大体ヲ通ジテ、肉眼的及ビ組織的所見相一致シ、併モ「プラスマ」細胞ハ陰性ナリシヲ以テ其贅長繁雜ニ亘ランヲ恐レ、茲ニハ只單ニ總括的ニ記載スルニ止ム、

(甲)、肉眼的所見、

外面ニ於テハ、常ノ如ク一般ニ下葉ニ多ク、肺炎病竈ヲ認ム、即チ其部ノ色淡ニシテ、硬度尋常ヨリモ鞏、壓ニヨリテ捻髮音ヲ聞カズ、

割面一般ニ平滑ナルモ、此部ノ實實シ、壓出スルトコロノ氣泡ヲ含ム液ヲ殆ンド又ハ全ク出サズ、其一片ヲトリテ水中ニ投ズルニ忽チ、又ハ徐々ニ沈降ス、

此部ノ色ニ就テハ古來ヨリ喧傳セラルヽトコロニシテ、結締織ノ增殖ニヨリ、或ハ呼吸上皮、種々ノ血球、小圓形細胞、又ハ其破壞物ノ肺胞ニ强ク充滿セラルヽニヨリ、白色ヲ呈ス、之レ「アイセーブノイモニー」ノ名ノ起

ル所以ナリ、

サレド本例ニ於テハカヽル白色ヲ呈セルモノヲ見ズシテ、寧ロ色淡乃至淡紅ナリキ、故ニ余ハ少ナクモ本邦ニ於テハ此「ツイセ―プノイモニー」ノ餘リ多カラザルヲ信ゼント欲ス、

（乙）、顯微鏡的所見、

一般ニ肉眼的加答兒性肺炎ノ存スルトコロニ於テハ、胞囊ハ尋常肺胞ヨリモ遙カニ稀疎ニシテ、又肺胞中隔ハ著シク肥厚セルヲ認ム、而シテ肺胞腔ハ剝離セル呼吸上皮、白血球、赤血球、及ビ淋巴球等、又ハ之レ等ノ變性或ハ破碎セルモノヲ以テ充滿セラレ、殆ンド腔ノ認織シ得ザルモノアルヲ見ル、其輕度ナルモノニ於テハ、上記充實物ハ稍緩疎ニ存在シ、辛ウジテ腔ヲ認メ得、

併シテ、之レ等ノ病竈ニ於テハ概シテ細血管充盈シ、稍々欝血ノ狀態ヲ示ス、

氣管支ノ細小ナルモノハ常ニ剝離セル上皮細胞、赤血球、白血球及ビ淋巴球ヲ以テ閉塞セラレ、其上皮細胞ハ或ハ存在シ、或ハ其四五相連袖剝離シ、以テ管腔中ニ前記ノ充實物ト混在セルヲ認ム、又稀レニ其場所ニ殘留存在セル圓柱狀上皮ハ、多樣ニ變化シ、其上皮細胞腔或ハ上皮下結締織中ニ小圓形細胞ノ滲潤セルヲ認ム、

肺組織ニ於ケル結締織增殖ト見做スベキハ、只小氣管支、及ビ血管壁周圍ニ於テノミ、一般ニ、極輕度ニ增殖セル傾キアルヲ認ムルモ、併モ彼ノ所謂 „Ein Bild, wie es von der syphilitischen interstitiellen Pneumonie hereditär luetischer Kinder bekannt ist„ 即チ完全ト謂ヒツベキ „weisse Pneumonie„ ヲ見出スコトヲ得ザリキ、

余ノ材料中、最モ梅毒ノ猛烈ナリシ汎發性梅毒ノ一例ニ於テスラ、其氣管支及ビ血管周圍ニ輕度ノ結締織增殖ヲ認メシ以外、彼ノ肺胞壁周圍、又ハ肺胞中隔ニ特別ノ結締織增殖ヲ證明シ得ザリキ、

此氣管支及ビ血管周圍、結締織、並ビニ肺胞壁ニハ一般ニ圓形細胞ノ滲潤ヲ見ルモ「プラスマ」細胞ニ至ツテハ毫モ見出スコト能ハズ、然ルニ余ハ、本症ニ於テ「プラスマ」細胞ノ存在ヲ豫期セシヲ以テ、今之レト相反スル結果ヲ得、或ハ其染色方法等ノ拙劣ニ起因スルニ非ザルカト、茲ニ於テカ再三再四相反復シテ「プラスマ」細胞ノ存セル他ノ比較材料ト同時ニ、同方法ヲ以テ染色セルニ、此ノ比較材料ニハ「プラスマ」細胞ノ好ク染色シ、存在スルヲ認ムルモ、先天性梅毒肺ニ於テハ常ニ陰性ニシテ見出スコト能ハザリキ、只一例ニ於テ淋巴球等ノ滲潤セル中ニ彼ノマルシヤルコー氏ノ定型性「プラスマ」細胞二三混在セルヲ見タルモ、此「プラスマ」細胞ニ就テハ其存在數ノ非常ニ少ナキト、及ビ二十二例中只單ニ其一例ニ於テ見出セルノミナレバ、先天性梅毒肺ニ對シ何等意味ナキモノトシテ、大過ナカラント欲ス、

滲潤セル淋巴細胞ノ多クハ小淋巴球ニシテ、其他嫌基性嗜好單核白血球、極稀レニハ中性嗜好多核白血球ヲ認ム、又偶ニハ巨大細胞ノ如キモノヲ認ムルモ、之ヲ精査スレバ、上皮細胞ノ四、五、乃至七、八、相融合存セルニ過ギザルヲ覺ル、

而シテストレーブ氏ノ先天性梅毒肺ニ於テ注意スベキ要素ト稱セシ、正規的腺管（regelmässiger Drüsengang）ハ只其二例ニ於テ之レヲ認メシノミ、

此腺管樣物ハ一般ニ、單層球狀乃至短圓柱狀上皮ヨリ蔽ハル、

其他黴毒ニシバシバ來ルトコロノ動脈內膜ノ增殖ハ、只僅少ノ例ニ於テノミ認メラレ能フモ、之レニヨリ來ル管腔閉塞ノ完全ナルモノヲ證明シ得ザリキ、

第五章　結論

一、先天性梅毒ヲ有スルモノハ其輕重ニ差アルモ、必ズ加答兒性肺炎ヲ具備ス、

二、從來學者ノ先天性梅毒ニ必發スルガ如ク稱ヘシ、「ヴイセ―プノイモニ―」ハ左程多カラザルコト、且ツ其度甚ダ輕微ナリ、少ナクトモ日本人ニ於テハ然リ、

三、梅毒ノ際ニ腎及ビ大動脈ニ著シク多數ニ現出スル「プラスマ」細胞（之レヲ以テ二三學者ハ梅毒ニ於ケル特有標準点ト見做ス）ハ其肺ニ於テハ證明スルコト能ハズ、

頃日ライプチヒニ於テホイプシュマン（Heubschmann）氏ハ先天性梅毒ニ於ケル脾ヲ檢シ「プラスマ」細胞ノ常ニ陰性ナリシコトヲ發表セリ、

四、何故ニ先天性梅毒肺炎ニ「プラスマ」細胞ヲ見出シ能ハザルカ、未ダ之レヲ公言シ得ズト雖モ、余ハ左ノ二項ヲ推薦セント欲ス、

甲、年齡ニ關スルコト、

ホイプシュマン氏其他二三學者ノ稱スルガ如ク初生兒ニハ陰性ナルニアラザルカ、余モ亦此說ニ左袒セントスルモノ、一人ナリ、サレド本例中、遲發性先天梅毒ト名ツケラレシ、八歲及ビ十七歲ノ二例ニモ、同樣ニ「プラスマ」細胞ヲ認メ得ザリシヲ以テ見レバ、年齡ノ關係アリトスルモ、尙少ナクモ他ニ原因ノ存スルニアラザルカ、

乙、急性炎症ニ來ラザルコト、

「プラスマ」細胞ハ多ク慢性炎症時トシテハ亞急性炎症ニ現出スルモノナルコトハ、諸學者ノ首肯認織スルトコロナリ、而シテ本例ニ於テハ、主ニ急性炎症ナルガ爲メニ、其陰性ナルニ非ザルカ、暫ク記シテ以テ後日ノ解決ニ俟タントス、

五、故ニ先天性梅毒ニ於ケル肺炎ト、其他ノ肺炎トノ鑑別トナルベキ絕對的特有ノ標準点ナシ、

强テ之レヲ定メントスレバ小氣管支周圍及ビ血管周圍ニ於ケル結締織ノ比較的增殖、並ビニ梅毒性動脈內膜炎トモ稱スベキ、內膜ノ增殖テフ、薄弱ナル此二項ニヨラザルベカラズ、

終リニ臨ミ金澤醫專校學生田村惣七氏ノ夏期休暇中來リ或ハ切片ニ或ハ染色ニ盡力セラレシヲ多謝ス。

（大正二年十一月記ス）

Literatur.

1. 植正信氏．プラスマ細胞及ルツセル氏小体ニ就テ（東京醫學會雜誌第二十六卷第八號及ビ第九號．明治四十五年）
2. Otto Heubner, Syphilis im Kindesalter. 1893.
3. H. Stroebe, Zur Histologie der congenitalen Nieren- und Lungensyphilis. (Cent.-Bl. f. allg. Path. u. path. Anatom. Bd. 2. No. 24. 1891.)
4. Adolf, Rudimentäre und larvirte Pneumonieen, nebst ätiologischen Bemerkungen über Pneumonieinfection. (Deutsches Archiv f. klinische Medicin. Bd. 41. 1887.)
5. Derselbe, Zur Plasmazellefrage.

(Fol. Haemat. Bd. 11. Theil 2. S. 170.)
6. Derselbe, Weitere kritische Ausführungen zum gegenwärtige Stand der Plasmazellfrage (Virch. Arch. Bd. 169. 1902.)
7. Derselbe, Ueber Plasmazellen. (Ztl.-bl. f. allg. Path. Bd. 20. 1909.)
8. Derselbe, Die histologische Diagnose der Salpingitis gonorrhoica. (D. med. W.-schr. 1908.)
9. Ceelen, Ueber Plasmazelle in den Nieren. (Virch. Arch. f. klinische Med. Bd. 211. H. 2. 1913.)
10. Fukuschi, Ueber die pathologische Histologie der syphilitischen Aortitis mit besonderer Berücksichtigung des Vorkommens von Plasmazellen (Virch. Arch. Bb. 211. H. 3. 1913.)
11. Heubschmann, Das Verhalten der Plasmazellen in der Milz bei infektiösen Prozessen. (Deutsche pathologische Gesellschft in Marburg. 1913.)

●生理學上ヨリ見タル男性美

東京慈惠醫學專門學校
醫學博士　生沼曹六（三十年卒業）

▲人體美ノ基本律

性美ノ觀念ハ人種ヤ國俗ヤ時代ノ傾向ヤ各人ノ嗜好ナドニ依ツテソレソレ多少ノ差ヲ免レヌノデアルガ、大體ニ於テハ略一定ノ標準ヲ立ツルコトガ出來ル。其第一ハ身體諸部ノ釣合デアツテ、普ク學者間ニ認メラレテ居ルフリツチユ氏ノ健康則ニ依ルト、脊柱ノ長サデ以テ身體諸部ノ長サヲ測ル基礎トシテ居ル、コノ脊柱ノ長サハ鼻ノ下緣（イ）カラ耻骨縫際ノ上緣（ロ）マデノ長サト相等シク、又コノ長サヲ四等分シタモノハ恰度鼻ノ下緣（イ）カラ顱頂（ハ）マデノ長サニ相當スル。仍チ前ノヲ原尺トシ、後ノヲ小原尺トシテ各部ノ測定ノ律ガ出來テ居ルノデアル左右肩胛關節（ヘ）カラ（イ）點ヲ過ギテ兩直線ヲ引キ、更ニハ點カラソレト併行ニ兩直線ヲ引クトニ點ニ於テ相合シテ其處ニ正方形ガ出來ル、コレガ頭蓋ノ核デ其對角線ニ、ニハ即チ其幅ヲ示スモノデアル。又ホ點カラ左右ノ肩胛關節（ヘ）マデノ距離ハ各右ノ一小原尺ニ合ハナケレバナラヌ。又ロ點カラ半小原尺ダケ左右ニ取ツタ長サ（ト）ハ即チ左右股關節間ノ距離デアラネバナラヌ。又左右ノ肩胛關節（ヘ）ト各他ノ側ノ股關節（ト）トヲ互ニ相結ビ付クル時ハ、其兩線ノ合スル所即チヲ點ガ臍ノ位置デアラネバナラヌ、然ルニ往々之ニ合シナイ人ガアル。又ホ點カライ、ヘニ並行シタニ線ヲ引ク時ハ其線ハ前ノヘ、トノ線ト相交又スル所即チ左右ノリ點ハ乳嘴ノアルベキ位置デアル。又肩カラ肱（ヌ）マデノ長サハ何レカ一方ノ肩カラ他ノ側ノ乳嘴マデノ長サニ等シク、肱カラ手首（ル）マデノ長サハ乳嘴カラ臍マデノ長サニ等シク、手（手首カラ先）ノ長サハ臍カラ股關節マデノ長サニ等シク。又大腿ノ長サハ（トカラオマデ）ハ或一方ノ側ノ股關節カラ他ノ一方ノ乳嘴マデニ等シク、下腿ノ長サハ（オカラワマデ）ハ同側同志ノ股關節カラ乳嘴マデノ長サニ等シク、足（足袋ヲ穿ク部分）ノ高サハ殆ド半小原尺ニ等シイ。即チ上肢ヤ下肢ノ全長ハコ、ニ擧ゲタ其各ヲ合シタモノデアルノダガ、全體ノ身長（ハカラカマデ）ハ小原尺ノ十倍三分ノ一若クハ十倍二分ノ一ニ等シイトナツ